

姫路の防御

軍部の拠点

姫路は重要な都市—特に大阪と京都のような—を含む関西と西日本の他の地域を結ぶ戦略的な位置を占めていた。池田輝政(1565-1613)が城主として引き継いだとき、防御力を拡張し刷新した。1601年から1609年の間、輝政は城下町を土塁と土の堤防で強化し、新しくより大きな天守閣を建て、その白漆喰の壁により巨大な天守閣には白鷺城とあだ名がついた。輝政の新しい姫路は三層の防御があった、すなわち外側にある町、侍が住む中央環状の近隣、そして城そのものを含む真ん中の地帯である。

城と町：姫路の防御施設

包囲防御

「内郭」にある貯蔵所、それは城の中央の防御環であるが、食料と燃料が入れられており包囲されたときには侍の兵舎として倍にすることができた。武器と必需品も主要塞と3つの補助櫓に蓄えられた。

門

城に入るには一連の嚴重に強化された門を通らなければならなかった。堀の内側の土手にある土塁に建てられていたので、門は石の壁、険しい連絡用通路そして物見櫓に守られている。

白壁：上品な耐火性

火事は日本の城では常にある危険であった。それはその建物のほとんどが木でできていたからだ。姫路の壁に使われている石灰を元にした白漆喰は耐火性があるだけでなく、目を引くものでもある。この荘厳な城は、視覚的に新しい時代の到来を示し、幕府の権威を具現化したのだ。

射撃手と弓の射手のための狭間

石を投げ落とす穴

石を投げる台

防御者の隠れ場所

武器棚

西の丸の物見櫓

西の丸は本多忠政(1575-1631)によって開発された。彼はその地域を土壁と物見櫓で囲い、新しい建物を城の他の部分同様、耐火性のある白漆喰で完成させた。櫓の壁は銃器攻撃に耐えられるよう特に分厚くされた。櫓を結ぶ長い回廊と石を落とす穴、そして弓の射手と砲撃手のための狭間がさらなる防衛力強化のために付け加えられた。